
日本語コースから始まった被災地支援活動

—地域日本語教室の社会参加への試み—

Trial of social participation of a regional Japanese class through support to Tohoku

宮崎 妙子*

MIYAZAKI Taeko

On the 18th of March, 2011, one week after the disaster, in Musashino International Association (MIA), we had a regular Friday Morning Japanese course where voices such as "We want to do something for the affected people.", "What can we do for them?" were raised by the participants. Both foreign and Japanese residents in MIA Japanese course faced the difficult social problems of which they tried to think out their own solutions. However, they knew that they could not do anything alone and they needed cooperators; they felt equally themselves as members of the society and they were equal. One particular voice from foreign residents pushed me strongly to take action. The voice is saying, "There is no difference between Japanese and foreigners. We are the same."

MIA Volunteer Group was set up and it has continued "support Tohoku activities" for one year. The group has two purposes; the one is that the members of MIA Japanese course participate in the society through supporting the affected foreign residents in the regional Japanese language class. The other is to let the Japanese people, who are neither interested nor concerned foreign residents, the foreigners who volunteer for Tohoku, saying "There is no difference between Japanese and foreigners. We are the same".

It is said that a regional Japanese language class have 5 functions, one of which is "Social participation". On the other hand, a regional Japanese language class is also said to be frontline of multiculturalization of Japanese society, "Multicultural

*武蔵野市国際交流協会日本語学習支援コーディネーター

Symbiotic Societies" which is a society where both foreign and Japanese residents live as a member of the society equally, respecting each other.

First, I will report the support activities, and next, I will reflect them. Finally, I will examine the possibility of a regional Japanese language class.

はじめに

ボランティアによる地域日本語教室は、インドシナ難民の受け入れ(1979年)や各地での国際交流協会の設立(1980年代)に伴い誕生、発展してきた。私の活動する武蔵野市国際交流協会(以下、MIA)は1989年に発足したが、直後に日本語教室が開設され、すでに20年の歴史をもつ。

この間、社会は大きく変化し、地域日本語教室も変化に合わせた活動が期待されている。発足当初には聞くことのなかった「多文化共生」という語が今日では頻繁に使われ、日常的・継続的に活動が行われる地域日本語教室は「多文化共生」の最前線にある¹と言われる。

一方、地域日本語教室をめぐる議論も盛んになり、研究も進んだ。地域日本語教室には5つの機能(居場所・国際理解・交流・日本語学習・地域参加) [野山他2009:74]があるとされ、これら5つの機能を地域日本語教室が追求していくことも期待されている。これらの期待に応えるためには、地域日本語教室の理念を理解し、その実現に向けて歩めるコーディネーターが必要とされ、コーディネーター養成講座も開かれるようになった²。

私は、MIAが2003年に設置した日本語学習支援コーディネーターを当初より務め、東京外国語大学多文化・多言語教育研究センター主催の「多文化社会コーディネーターコース」で学び、「地域日本語教室とは」を問い続けてきた。本稿では、東日本大震災を機に始まったMIA日本語コース(以下、日本語コース)参加者たちによる社会参加を目指した活動を報告、省察し、地域日本語教室の社会参加について論を進める。

1. 「MIA有志の会」発足と活動

東日本大震災が発生した3月11日午前は、MIAで日本語コースが開かれていた。その日の午後、関係者の多くが帰宅したところに地震が起こった。翌週の18日、日本語コースに集まったメンバーは互いの無事を確かめあい、防災について確認しながら、その時、どこで何をしていたかをそれぞれの母語も交えて不安を吐き出す時間をもった。地域日本語教室の多くが、同じような活動をしたと聞く。話し合っているうちに、外

国人・日本人³双方から被災地に対し「なにかしたい」、「私たちに何ができるか」との声があがってきた。とくに「日本人も外国人もない。みんな同じ」という外国人からの声には大きなインパクトがあった。

このような声は、日本語コースボランティアが安否を気遣い、それぞれ思いつくままに連絡をとった過去の参加者からも、同様にあがってきた。

平穏無事に活動が続けることができる地域の日本語教室は、被災地に対し何ができるだろう。この問題意識から、日本語コースを基盤に「MIA有志の会」が発足、その活動が始まった。

1-1. 2011年3月：活動開始

挙がってきた声に、どのように応えることができるのだろうか。被災は広範におよび、どこのだれに何をどのようにすればいいのか見当がつかない。また、支援活動には資金が不可欠であるが、調達はどうすればいいのか。さらに、活動には志を同じくする仲間が必要だ。しかし、この点だけは確保できている。声をあげた全員が仲間である。

そのような折、MIA主催の夏期教員ワークショップ⁴に参加したことがあると言う石巻在住のSさんから支援を求めるメールが教員ワークショップのメーリングリストに舞い込んだ。添付ファイルには長いリストに希望物資が書き出されていたが、Sさんの要請に応えることにだれも異存はなかった。

資金に関しては、日本語コースの元参加者TAさんが特技を生かして一日ヒーリングサロンを開き、その収益を全額、活動に寄付してくれることになった。TAさんは当時、日本語コースに参加していなかったが、「なにかしたい」といち早く声をあげた一人である。被災地で停電や水道水の出ないことを、「ミャンマーはね、そんなの当たり前」と言い、世界から集まる義援金の報道に「日本はおおきい国。世界が助ける。ミャンマーは…」とさびしそだった。3月24日にミャンマーにも地震がおり、死傷者が出ていたのだ。

さて、具体的な活動内容とその宛先が定まり、いくばくかの資金の目途もたち、活動は滑り出した。その後、仲間が仲間を呼び、MIA有志の会メンバーは日本語コース関係者以外にも広がり、外国人も日本人も増えていった。メンバーが全員、揃うことは物理的に不可能であるため、連絡は電子メールに頼るが、メーリングリストは作らず、その都度、私が全員にBCCで送付することになった。出入りが自由なほうがいい、とくに、誰にも知られず活動を離脱できるほうがよいのではないかとの意見が主流であった。私の仕事量は増えるが、メンバーの自由な参加が保証されることが重要視された結果である。

1-2. 2011年5月：活動する外国人

日本語がまだまだおぼつかないJHさんが、ある日の日本語コースで「あした、行きます」と言った。これを聞いた日本語コースボランティアが「どこへ遊びに行くの?」と気軽に聞いたところ、被災地のヘドロ出しに行くことがわかり、驚いたという。JHさんは、日本語コース併設の保育室に幼児を預けて日本語コースに参加している。この幼児を夫君に預け、夫君の務める学校が主催する被災地ボランティア活動に参加するという。夫婦が交代で子守りをしながらの被災地訪問だそうだ。

震災をきっかけに、私たち日本人が知らなかった外国人の属するコミュニティ、その活動と行動力、日本社会への思い、日本社会への参加実態などを知ることになった。日本語コースで話し合ううちに、日本語コース参加の外国人の中にJHさんのように現地に赴きボランティア活動をしている人、原発に関するシンポジウムを主催している人、出身地のヨーロッパに向けて被災地の現状をインターネットで発信している人、義援金集めをしている人などがいることがわかってきた。そのような人たちに日本語コースで活動報告をしてもらった。時には、日本語の流暢な外国人に通訳をお願いすることもあったが、聞き手の大半は日本人であった。

震災以降、各地域において外国人のための防災訓練や災害時の外国人支援などがこれまで以上に活性化している。外国人に防災の知識を持ってもらうことは肝要であり、そのための努力は不可欠である。しかし、これらの視点は、外国人を支援の対象とし、「助けられる存在」として位置づけてはいないだろうか。この視点だけでは、いつまでも現状は変わらない。外国からボランティアとしてやって来た外国人の支援活動についてはマスコミがいくつも報道した。だが、在日外国人が日本人と同じく現地でボランティア活動する姿こそが、日本社会が外国人と日本人の対等性を意識化できるきっかけになるのではないだろうか。そのためには、外国人の活動を日本社会に知ってもらわなければならない。その機会を作りたい。しかし、MIA内だけでは限られている。そこで、日本語教育学会に被災地支援で活躍する在日外国人の姿を日本社会にアピールしていただくよう依頼した。

1-3. 2011年6月：新たな要請

仙台のTさん⁵より、岩手県、宮城県の壊滅した地域日本語教室への教材支援の要請を受けた。リストにはぎっしり要望図書名が記されている。日本語教材出版各社に寄贈を依頼したところ、どの出版社からも協力の申し出が届いた。だれもかれもが、何かしたいと思い、できることが見つかることに安堵の念があったのではないだろうか。

日本語教育学会にも、今後、教材寄贈依頼があれば学会に窓口になっていただきたい

い旨、お願いした。名もなきボランティアグループが動くより、日本語教育全体を考える立場にある学会に率先して動いていただければと思ったからである。

1-4. 2011年7月：日本語教室と繋がる

教材寄贈が縁で岩手県の大船渡市、陸前高田市⁶の日本語教室と繋がった。教室は再開されていないが、担当者のOさんが精力的に教室参加者の安否を尋ね、生活環境を調べているという。自身も被災者であり、家も職も失っているOさんを通して、教室参加の外国人からの要望が届き、個人の顔が見えるようになってきた。現地教室参加者の母語を知ったことで、同じ母語をもつ日本語コース参加者が母語で手紙を書いたり、全員で応援カードを送ったりした。「テレビでえいぞうをみて、こころがすごくいたかったです」と話すCSさんも母語で手紙を書いてくれた一人である。カードは、HAさんが手製のオリジナルを大量に寄付してくれた。

1-5. 2011年8月：「電動かき氷機とハロハロ」

Oさんから電動氷かき機の依頼があった。フィリピンの人たちのお気に入りのハロハロ⁷を作りたいと言う。これを聞いたMIA有志の会では、意見が二分した。「送ろう」というものと、「電動でなくても、手動でいいんじゃないか」というものであった。電動は手動より値段が高い。

日本語コースのフィリピン出身者たちに訊くと、「フィリピンには電動がない。日本に来て電動かき氷機を見て、とても嬉しかった」との返答があり、即、電動を送ることで話がまとまった。さらに、「かき氷機だけではハロハロは作れない。食材がいる」とフィリピン出身者たちが食材を調達し、タガログ語の手紙を添えてくれた。訊かなければわからないことがある、と実感したできごとであった。

このころには、Oさんからの情報で大船渡・東京間を定期輸送する運送会社があることを知り、物資は無料で配送してもらえるようになっていた。このような運送会社の存在を知ること、その好意にうれしく甘えることも活動を続ける上で重要な要素だと学んだ。

1-6. 2011年10月：「もこもこした毛布」

日本語コースは夏休みが長い。秋期は10月に始まる。久しぶりに顔をあわせたNRさんから、「寒くなった。(被災地では)毛布がほしいでしょ。」と声をかけられた。給料日は15日なのでそれ以降なら買えるから、Oさんに連絡をとってほしいと言う。さっそくOさんに問い合わせると、現地日本語教室の方たちの何人かが毛布を希望してい

るとのメールが届いた。「もこもこした毛布」の要望を日本語コースに紹介したところ、初級レベルの主婦グループは被災地をテーマに話し合い、「もこもこ」を口ずさんで全員で近隣のスーパーへ実物を見に行つたという。その後、ご主人と毛布を買いに行き、嵩張る毛布を何枚もMIAに届けてくれた人がいた。未使用のものを家から持ってきてくれた人もいた。

物資支援は資金を必要とする。また、ボランティアな活動は自由意思の尊重にあり、応じたくない人に、居心地の悪い思いをさせてはならない。したがって、無理強いと受け取られる言動は慎まなければならない。日本語コースの全員が毛布を持ち寄つたわけではないように、全員が常に、同じ活動をしているわけではないことを付言しておきたい。

1-7. 2011年11月：外国人による支援活動報告会

支援活動をする外国人の姿を日本社会に知ってもらう機会が訪れた。11月にMIAで開かれた「むさしの国際交流まつり2011」で、外国人による支援活動報告会を企画した。日本語コースの大先輩や現参加者など6組がそれぞれの活動を報告したが、夫婦による発表、家族全員の応援を受けての報告など、家族を巻き込んだ会になった。中でも、印象深かったのはSJさんの報告だった。インドでボランティア活動をしているお母さんが5月に来日し、「避難所へ行ってみたくて言ったのがきっかけで、お母さんといっしょにお米10キロをもって」初めて被災地を訪れ、その後、定期的に現地を訪問することになったという。会場からは次のようなフィードバックが寄せられた。

- ・ いろいろな国の方々がいろいろな形でボランティア活動をしてくださっているのを知り、とても感謝の気持ちでいっぱいになりました。私も私なりにできることをしていきたいと思いました。
- ・ 支援する人、される人じゃなくて、助け合うという気持ちが、ごく自然にあるんですね。助けることも助けられることも日本人はどっちも苦手。どのようにしたら、みなさんのような愛あふれる人間になれるのでしょうか。
- ・ HAさんの「楽しいことは いっしょに楽しみ、苦しいときは、いっしょにがんばる…」という言葉が印象的でした。
- ・ 日本人以外の方たちがこれほど積極的に行動を起こし、且つ継続されていることに頭が下がる思いです。私も、まず忘れないでいること、そして自分にできることを考えたいとおもいます。

このような活動を広く知ってもらいたいと、地域の新聞社支局や地域のテレビ会社に取材を要請したが、所詮、一市民ボランティアである。歯牙にもかけてもらえなかった。

11月には再開されたOさんたちの教室から教材用台所用品の絵カードの依頼があり、美術の専門家Hさん(元MIAボランティア)がさっそく制作、それを現地に届けた。

1-8. 2011年12月：公正、公平、平等

支援物資は、現地でどのように分配されているのかとの話題がもちあがった。公正に、公平に分配することがどの程度可能かとの問題意識である。そのような折、上述の仙台のTさんから宮城県石巻の日本語教室再開の報告と教材支援の依頼が届いた。

日本語教育学会関係者の協力で教材は届けられたが、その後、Tさんの中に「(教室全員とは別に)この人(女性)にだけは何かしてあげたい」という気持ちがあることを知った。同じころ、Oさんからも「被災地のみんなが同じ」とは言えないとのメールが届いた。「すべてを失った人たちがいる」一方で「被害はなく、仕事もあり、震災の影響のほとんどなかった方も(支援を受ける)権利を訴える」と書かれたメールからは、被災地で「格差が広がりつつある」ことを憂い、「平等という名目で不平等がまかり通る」ことへの悲憤が感じ取れる。公正、公平とは何かとの問いに苦しんでいるOさんのメールは、一方で「この方(女性)にだけは」と手厚い支援の必要な人があることを伝えていた。二人の示唆する「この人」はともに日本人男性と結婚している外国籍の女性である。

Oさんは「この地方」の国際結婚の現状を「男性たちが、親の勧めで外国人妻を娶るということが多いのです。いわゆるブローカーにお金を払って結婚するのです。中には、夫が二回外国籍の方を妻とし離婚し、自分は三人目の妻だという方がいらっしゃいます。現実には厳しいです」と書き、避難所で「外国人でしょ」と言われ、小さくなっている外国人の姿にも触れている。

Tさん、Oさん二人に共通した思いから、改めて、平等、公平のむずかしさが感じられ、難問山積の現地に、公正というなお重い課題が突きつけられていることを知った。国際結婚に関しては、日本語コースにも日本人男性と結婚している女性が多い。経済発展の著しい韓国にもOさんの指摘に似た問題があると韓国出身のCYさんは言う。

なお、上記2人の女性には、それぞれ共通の母語を持つ日本語コース現参加者のCSさんや元参加者TDさんが母語で応援レターを書いてくれた。TDさんは母語を共にする友人3人に声をかけ、併せて4通の手紙を送ったという。

1-9. 2012年2月：一方向から双方向へ

日本語コースのLCさんから大量の冬物衣類寄付の申し出があった。ビジネスで扱っている子ども用雑貨も含めて、段ボール10箱に及ぶ。「どうして？仕事、大丈夫？」「MIAがボランティアしてるでしょ。だから、わたしたちもボランティア…」と言うLCさんは、日本人の奥さんと相談して寄付を決めたという。「今、寒いから、はやく送って」と少々、身勝手なボランティアである。さっそく、NTさんから届いていた子ども用衣類とともに大船渡に送った。前述の運送会社の運転手さんが現地に運び、それをOさん側が日本語教室や仮設に届けるという流れは、今や定着し、輸送にはまったくお金がかからないシステムが確立している。

この流れが逆方向にも動き始めた。仮設住まいの女性たちの自立を目指す小さな試みが、Oさんたちにより始められ、完成した手芸品が東京の支援者に届けられるようになった。外国人支援に重心をおいていたOさんは、被災者に日本人も外国人もないことに気づき、仮設生活者を中心に自立のための手芸チームを作った。その手芸チームに日本語教室の外国人が参加し始めたと聞く。

手芸品とともに、日本語コースへのお礼として被災地特産のりんごや銘菓が届き、現地の関係者の気持ちが味覚を通して日本語コースの参加者に伝わった。

また、このころ、仙台のTさんより新たに再開される八戸の日本語教室への教材依頼があった。さっそく、日本語教育学会関係者に連絡したところ、出版社からの寄贈が約束された。

1-10. 2012年3月：被災地との協働

関係者を介して、ある地域で支援物資(消費期限の迫る食品)が大量に死蔵されており、その有効活用に協力いただきたいとの要請を受けた。これを日本語コースで紹介したところ、2月に再度、福島を訪れたRBさんが「ふくしまも、おなじでした」と余剰物資に頭を悩ます被災地の話をしてくれた。LTさんも「どうして、みんなにあげないのか」と首をかしげる。

有効活用に日本語コース参加者(外国人も日本人も)も協力してくれたが、毎春、母国の子ども支援活動を兼ねてタイへ一時帰国するTOさんが、重い物資を飛行機で国に持ち帰り、施設に贈って喜ばれたと報告してくれた。

その後、これらの物資は、関係者の協働が功を奏し、無駄にされることなく、必要とする人たちの手に渡ったとのことである。

以上が一年の活動報告である。絆、家族がキーワードになった一年であり、マスコミは美談を伝えるが、現地からは、辛い経験が家族を崩壊させ、弱い立場の外国人女

性がさらなる苦しみを味わっているとの情報も届く。MIA有志の会の活動は物資援助から始まり、TさんやOさんという個人と繋がることによってマスコミでは知り得なかった被災地の現状を知ることになり、モノの受け渡しだけではなく、ともに考え、行動する信頼できるパートナーとしての支援が求められるようになった。震災の現実が次第に遠ざかる東京において、また、参加者が入れ替わる日本語コースにおいて、活動をどこまで続けることができるだろう。今後に残された課題である。

2. 活動のふりかえりと省察

以上の被災地支援活動は、日本語コースの社会参加への試みである。頭ではなく、むしろ感情から始まった活動は、設定された目的に向かって計画的に進められたものではなく、すべてが予測不能の中、その時、その場での対応が求められる活動であったが、次のような目的が次第に明示化されていった。それは、①外国人・日本人が日本社会の抱える問題(被災者や被災地)をともに考え、協働して支援活動すること、②支援活動に参加する外国人の存在を日本社会に知らせることの2点であった。そのため、日本語コースを基盤にした「MIA有志の会」は、日本語コースに無縁の人たちをも巻き込んだ。したがって、この活動をMIA日本語学習支援コーディネーターの名の下に報告していいものかどうか大きな迷いがある。MIA日本語学習支援コーディネーターに委託される業務は、「日本語コース全体のコーディネート」として細目が記され、今回のような活動は含まれない。しかし、未曾有の大災害をだれが予測できただろう。災害後の社会で、新しい複合的な社会問題を目の前にして、新たな活動や新たな役割の必要性に気付いた人が、「出会いの場を設定し、多様な人々の参加」と課題解決のための「協働を促し」[杉澤2009:21]、つなぎ役としてなにかを始める、それがコーディネーターではないだろうか。活動をふりかえると、私自身はほとんど無意識に、コーディネーターの5つの役割(①人と交流し、関係をつくる ②課題を探る ③リソースを発見しつつ ④社会をデザインする ⑤プログラムをともに作り、動かす)[杉澤2009:17]を、小規模なから実践してきたように思われる。

一方で、「MIA日本語学習支援コーディネーター」という肩書を活用したことも事実であり、出版社やメーカー、運送会社などに支援を依頼するときには、小さくてもやはり肩書の効能はあった。さらにMIA事務局の寛大なバックアップや協力も得た。MIAという人的、物的、社会的リソースを背景にした今回の活動は、MIA日本語学習支援コーディネーターの役割拡大として認知されるであろうか。以下では、解説を加えながら、活動をふりかえり、省察を試みる。

2-1. 場をつくる

コーディネーターの役割は参加→協働→創造の循環を推進することである[杉澤2009:21]。循環を起こすには循環が起こる場が必要であり、その場をどのように作るかが問題になる。3月18日の日本語コースで行われた話し合いを通して感じられたことは、参加者は被災地・被災者に対しそれぞれが思いを抱き、ひとりでは解決不可能な社会の課題に向き合い、ひとりではできないがゆえに仲間を求めているということであった。ひとりではできない以上、仲間は重要であり、問題意識がおなじであれば対等な関係は築かれやすい。「日本人も外国人もない、みんな同じ」関係である。少なくともこの日、日本語コース参加者は、個々人が社会の構成員としての意識を持ち、他者を構成員として認めていた。ここに「なにか」するための活動の場が、当然のごとく生まれた。その場は、物理的、精神的に繋がる日本語コースであり、その延長上に「MIA有志の会」が発足した。同時に、インターネット上にニューズレターという繋がり場が設けられた。

これら二つの固定的な場に対し、一期一会の流動的な出会いの場も生まれた。それは、発信された情報を受信し、行動を決意したメンバーがその都度つくる具体的な活動の場である。参加、協働はメンバーの完全な自由意思に任せられ、制約も管理もない。不特定多数のメンバーが毎回、一回限りの活動の場をつくり、そこで、課題解決のために参加・協働・創造(解決)・解散を繰り返してきた。

2-2. 繋ぐ・繋がる

MIA有志の会メンバー（以下、メンバー）を繋ぐのは、前述したように電子メールで送られるニューズレターであり、メンバーにはBCCで送付され、メンバーからの発信を受信できるのは私一人である。そこで、私に届いたあらゆる声(被災地からも、メンバーからも)を共有するためにニューズレターを発信し続け、一年で48通になった。日本語コースでは、多くの人が日本語で書かれたニューズレターが読めないため、可能な限り、情報を口頭で伝えるようにした。

ニューズレターは、はたして読まれるだろうかとの不安を感じながらの送信であったが、必ず、だれかから応答があり、それらは活動への提案、申し出、アドバイス、励まし、感想などさまざまであった。

発信への応答は大きな励みであるが、一方で、応えてもらうための努力が必要である。上野[2008:156]は「職場と違ってカネとポストを報酬に人を動かすわけにはいかない市民活動の現場では、やっていることのおもしろさと人間関係の魅力でしか、仲間を動員できない」と述べる。おもしろさの中には、被災地などの現実を知り、社会

を考えるきっかけが得られること、小さな活動ではあっても社会に参加し仲間と協働し、解決(創造)が実体験できることなどが挙げられるだろうか。経験の共有が人間関係を魅力的にするとと思われるが、小さな体験の積み重ねをメンバーは楽しんできただろうか。今後の継続のために、私一人が担ってきた繋ぐ役割をメンバーそれぞれが繋がる形に変えていく時期が来ている。現地との関係はこれまでの一方向から双方向へと変化し、現地との窓口が複数になり、各活動の担当に仲間がそれぞれ、あたるようになった。

MIA有志の会が目指したのは、日本語コースと被災地の日本語教室を繋ぐだけではなく、支援活動を行っている外国人と、とくに外国人に関心も興味もない日本人を繋ぐことであった。しかし、この目論見は期待したほどの成果は得られていない。ただし、今回の活動がなければ知り得なかった、日本語コースを始め、MIAの活動に参加する外国人の思い、活動、行動力や属するコミュニティなどを、活動を進める中で知ることができたのは幸運であった。宮島⁸は「日本では多文化共生という、すぐ外国人になにかしてあげるといふ話になる。日本語指導が大事とか通訳が大事とか。確かに大事ですが、彼らがどんな文化を持ち、どんな希望を心に抱いているかを見ていない」と述べる。私たちは外国人の「日本語ができない」という見える部分のみを好んで見てきたのではないだろうか。一般に地域日本語教室では、外国人の「にほんごがわからない」という見える部分だけが重視され、ひとりの人として知ろうとする努力に欠けていたことを痛感させられた。

2-3. 信頼関係を築く

活動を推し進めていくにはメンバーや被災地の関係者との信頼が不可欠である。信頼のネットワーク構築に向け、心がけたことは、常になにごとにも細やかで、丁寧な姿勢で臨むことであった。この姿勢は、どのような活動においても当然、重要なものではあるが、今回は非常にデリケートな立場におかれた人々との関係作りである。被災者に敬意(respect)をこめ、思いを同じくするメンバーへも敬意をもって接したいと常に願った。具体的には次のような動きが挙げられる。

被災地との繋がりは当初は電子メールであったが、次第に電話の回数が増えた。電話でのやりとりには、相手の声の音色や言い淀み、繰り返し、ときには無言というメタメッセージが含まれており、それが相手を理解する上で重要だと感じるようになった。また、現地からの依頼や要請に対しても、メンバーからの申し出や提案に対しても、NOを言わないことを原則とした。「NOは存在しない、必ず、なんらかの解決(創造)に結び付く」との経験を積み重ねることによって、メンバーは達成感が味わえ、次

の活動への期待に繋がり、それが信頼関係を強固にするとの確信が次第に持てるようになった。

メンバーに対しては、さらに次の点に留意した。ニューズレターの送信には写真を用いたり、TさんやOさんのナマの声を載せたりして、できるだけリアリティが伝わるよう心がけた。一方、日本語コースでは口頭で伝えるのだが、写真や実物などを活用して、見せる伝え方に腐心した。とくに日本語に不慣れな外国人たちの場合は、情報格差のないよう情報を丁寧に、わかりやすい日本語で発信する必要がある。この役割を、日本語コースのボランティアたちが十分に務めてくれた。

メンバー間においてさらに重要なことは、活動は強制ではなく、参加・不参加の自由が保証され、どちらを選んでも居心地悪くならず、それぞれの意思が尊重され、信頼できる関係を築くことであった。届いた被災地の情報やニュースは日本語コース全員に流したが、さりげなく、ニュートラルな態度でふるまうことを意識した。感情という圧力を排除し、やり過ぎて嫌がられることを避けなければならない。幸い、震災後も日本語コースにはリピーターが非常に多い。日本語コースに不安、不満、不信の空気が流れていないことの現れと捉えたい。

2-4. 日本語学習環境をつくる

被災地の日本語教室との関係では、教室再開に向けたOさんやTさんの努力を見落としてはならない。以下はOさんからのメールである。

今週から日本語教室を再開します。皆さんからの支援が背中を押してくれました。
(2011年9月26日)

1時間学習後の休憩時間に、武蔵野市さんからの支援物資の話をして、荷をほどき、みんなで分けておりましたら、「手紙が入ってる!」との声。手にすると、私の欲しかった、絵カードとタガログ語のお手紙があり、感動いたしました。

1人の方に、お手紙を読んでもいただきました。みな神妙な顔で、同胞の思いやりあふれる言葉に聞き入っていました。ありがとうございます。荷物を分けながら、これあったかいよね、すぐ使おうと話すのを聞きながら、震災後、日本語学習を希望して、休むことなく、教室にかよってきた彼女たちへのご褒美のような気がして、とてもありがたかったです。(2011年11月12日)

続いて、Tさんからのメールを紹介する。

この日本語教室の生徒の方々の中には、津波によってすべてを流失した方がいます。体験を伺うと、着の身着のまま逃げてすべてを失った方々にとって、日本語教室の再開は待ち望んでいたもので、そこで友だちと会うことがお一人お一人の支えでこれからの生活を力づけてくれるものであると、強く感じました。今回、教材を送っていただいたことで、再び日本語の学習を始め、言葉の力をつけてさらに強い生き方をされていかれると思います。(2011年12月3日)

被災された方々の多くは、生活がぎりぎりの状況で暮らしていらして、どうしても子どもを優先するので、自分のことはなかなかできません。このように教材をいただくと、ほんとうに助かります。今は、日本語教室で仲間に来て、お互いに力を得ているとみなさん話しています。震災前よりずっとその思いは強くなったそうです。(2012年2月28日)

MIA有志の会は現地の日本語教室再開に少しは貢献できたでしょうか。しかし、それ以上に、メンバーが得たことは大きい。それは「日本語教室」の意義であり、日本語学習の意味である。

被災地の地域日本語教室関係者と繋がったことで、そこに参加する外国人の状況を知ることができた。現地の日本語教室は、居場所として、また、職を失った外国人たちが自立を目指し、資格を取得するための日本語学習の場として期待されている。

一方、日本語コースでは、今活動と日本語学習はどのように関連付けられるだろう。日本語コース参加者には感じることや伝えたいことがあり、その声(「ハロハロの材料が必要だ」「寒くなってきた。毛布がほしいでしょう」などなど)が発信された。「もこもこした毛布」を取り上げたグループは毛布に関連した冬用品について話し合い、スーパーまで行って実地見学をした。あるグループは新聞の被災地の記事を切り抜き、写真について話し合っていたが、被災者への思いと日本語学習がグループメンバーの気持ちをもとにし、与えられた「勉強」ではなく、自然な感情のやりとりが感じられた。2011年11月の外国人による支援活動報告会では、非常にたどたどしい日本語レベルの人が、ローマ字で長い作文を書き、関係者を驚かせた。そして、私自身は話しかけられる機会が増えた。出身国で孤児の支援活動をしていると話してくれた人がいる。ご主人がアフリカの子どもたちを支援していると聞かせてくれた人がいる。「次回は、荷物をいつ送るのか」、「家にこれこれしかじかがあるが、役に立つだろうか」などと訊いてくれる人もいる。その人たちは懸命に、日本語で話そうと努める。日本語が一

朝一夕に流暢になることは期待できないが、言いたいことを発信できる環境が日本語の上達を後押しするのではないだろうか。「言いたいことがある」と自覚できる環境を教室につくることが肝要であり、今回の活動はその環境作りの役目を果たしているように思われる。

2-5. 声が聞こえる、声に応じる

課題は常にあちらからやって来る。教室で挙がった声「私たちになにができるか」(課題)を聴きとり、自分自身の内的な声にも耳を傾けることによって課題が共有され、活動が生まれた(解決)。被災地支援活動を行っている外国人の存在を知り、多くの人に知らせる方法(課題)を話し合い、外国人に要請して(協働)、報告会が実現した(解決)。教科書寄贈では要請に対し出版社に協力依頼をし、解決を見た。「もこもこした毛布」では、「Oさんに聴いてほしい」とのNRさんの発信から、参加、協働が起り、毛布発送という解決にいたった。

ノックの音がする。聞こえれば応える。すると、また、新たな声が聞こえ、応答する。受信・発信の繰り返しを螺旋を描いて協働を起し、創造へと結実する。「応える」はresponseであり、responsibilityに繋がる。ここでいうresponsibilityは社会的責任という他者から見た重苦しく融通のきかないものではなく、声を聴きとった者が報酬や成果を抜きにし、「できるできないは別にして、やっぱり応答して、関係をつくっていくこと」[春原2010:325]であり、それを最首[2010:318]は「内発的義務」と名付けた。

2011年3月18日の日本語コースは、参加者がそれぞれに内発的義務を感じとり、それが共有されたのではなかっただろうか。意識の共有がこの一年の継続的な活動を可能にしたと思われる。その間に、私たちに次から次に課題が訪れたが、「チャンスは準備された心に降りたつ」[福岡2007:128]。課題を受け止める心の準備が私たちの中に整っていったと考えるのは傲慢であろうか。

3. 地域日本語教室の社会参加

MIA有志の会による被災地支援活動は、2011年3月18日の日本語コースでの外国人の発言、「日本人も外国人もない。みんな同じ」が契機となった。震災以降、外国人支援に力を注ぎ、被災地で日本語教室を再開したOさんは、「外国人も日本人もない」と感じ、2012年1月、被災者自立支援の活動を起こした。以下では、「日本人も外国人もない」をキーワードに地域日本語教室の社会参加を考える。

3-1. 多文化共生と対等性

地域日本語教室の5つの機能のひとつに「地域参加」が挙げられていることは前述した。「地域参加」は教室参加外国人の最終目標とも言えるが、実際、日本語コースでも仕事やアルバイトを見つけたり、子どもの学校のPTAで活躍したり、友人を得たりという個別、かつ個人的な形で実現されている。しかし、地域日本語教室が「多文化共生」の最前線にあり、その活動から多文化共生社会創造が期待されるなら、「地域参加」を一步広げ、「社会参加」として社会作りに繋がる活動をも視野に入れたい。

一般に、地域日本語教室はともすれば日本語学習に専念し、社会をともに考える時間的、精神的余裕に乏しい。そのため、教える側と教わる側、つまり、支援者と被支援者の二極構造がしばしば指摘され、両者の対等な人間関係構築が課題となっている。「対等」は「多文化共生」のキーワード⁹である。

2011年3月18日、日本語コースから発せられた「(被災地に対し)何ができるか」との問いかけには、社会参加への意志が感じられた。「何かしたい」との思いは、外国人と日本人双方が「支援者側に立つ」ことによって共有され、被災者を「被支援者」とした活動が始まった。日本語コースの外国人と日本人が立ち位置を同じくし、共通の被支援者を得たことによって、両者の対等性が意識化されたと言える。しかし、それはあまりにも辛い皮肉であろう。

「日本人も外国人もない。みんな同じ」は外国人からの声であり、たとえばHAさんは前述したように、「楽しいことは、いっしょに楽しみ、苦しいときは、いっしょにがんばる…」と明言する。一方のOさんは、被災者には「外国人も日本人もない」と気付く。2つの発言からは、日本人だからといって、外国人だからといって区別も差別もしない、ともに助け合おう、ともに生きていこうとのメッセージが読み取れるが、この思いこそが多文化共生の理念であろう。

加藤[2008:251]は「共生のゆくえ」を考える中で、外国人も日本人も一個人として、「ともに日本社会のシステム自体を問うていくことはできないでしょうか」と投げかけるが、まず必要なのは「日本人も外国人もない。みんな同じ」と言い切る覚悟であり、そのような社会づくりに参加する意志であろう。

第1章で触れたように、「外国人だから」という理由で理不尽な差別を強いられる現実が被災地にもある。また、日本社会では外国人が日本人と同等の権利が認められていないことは周知のとおりである。しかし、制度がいかには是正されようと「外国人だから」との意識が日本社会から払拭されない限り、「みんな同じ」社会は生まれない。ここに、地域日本語教室の可能性を見出すことはできないだろうか。外国人の「言葉の壁」[田村2000:14]への挑戦から始まった地域日本語教室は、社会に現存する差別

や偏見という「心の壁」を崩していくことに寄与できるのではないだろうか。MIA有志の会の活動をMIA外部に広げた理由は、小規模ではあっても、日本社会に「外国人も日本人もない。みんな同じ社会の構成員である」ことに気づいてもらうためであった。各地にMIAのような地域日本語教室があること、被災地にも地域日本語教室があり、被災者には外国人もいることなどを伝えるためであり、被災地支援活動に携わる外国人の姿を知ってもらうためであった。そして、支援する外国人の存在を知ることから、日本人の中に外国人への敬意(respect)が芽生え、日本人の外国人に対する意識が変わることを期待した。

地域日本語教室が「社会参加」することによって、日本社会の変化にたとえ僅かでも寄与できるとすれば、それは外国人と日本人両者による協働の成果であり、両者は「支援者」という立場を共にすることになるだろう。では、被支援者はだれか。支援されるのは「弱者」ではなく、私たちの「未来の社会」であり、「未来を生きる人たち」である。ここに、両者の「対等性」は確保されると思われる。

3-2. 地域日本語教室再考

日本社会は今、これまでに経験したことのない多文化社会にあつて、さらに3月11日の大震災と原発事故を経験して、解決困難な多くの問題に直面し、新たな社会構想が求められている。「現実世界に生まれている深刻な諸問題を解くためにどうすればよいか」と問う清水[2003:150]は、「諸問題に通底する本質的な問題を見抜いてそれらを包摂できる適切な場をつくること」を解とした。その場は、たとえば、多文化が共生する社会であり、その社会を実現するためのひとつの場として、地域日本語教室が挙げられる。日本語コースから「私たちに何ができるか」の協議が始まり、「日本人も外国人もない、みんな同じ」との声に結集されて支援活動という協働が動き出した。

進歩するためには人間が協働する必要があると述べるクロード・レヴィ=ストロース[1970:72]は、協働の過程で各自の持ち寄り寄与が一体化されるが、各自の寄与には差異があり、差異が「協議を実り多く、且つ必要たらしめる」と続ける。日本語コースを含めた多文化・異文化満載の地域日本語教室の可能性はここにあると言えよう。2011年3月18日の「私たちになにができるか」との問いかけは日本語コースの外国人、日本人双方から挙がり、そこから「なに」かが始まった。むろん、今回は特殊な状況であり、この問いかけは被災地に向けられたものではあったが、長期的な展望にたつ答があると思われる。それは、「社会参加」である。被災に遭わず、日常活動が平穩に継続できる教室では、震災を地域日本語教室を再考する機会と捉え、多文化共生社会づくりの一步にすることも可能ではないだろうか。

地域日本語教室の社会参加は明日の社会づくりであり、教室が明日の社会づくりの担い手であると自覚できれば、教室の意義はさらに深まると思われる。そして、そのような教室活動を外に向けて発信することも、日本語学習支援コーディネーターの重要な役割であろう。

おわりに

2012年3月7日、国際交流基金の地球市民賞の授賞式会場に、陸前高田のOさんがいた。Oさんはその活動が評価され、岩手県を代表して理事長特別賞を受賞したのだ。Oさんのこれからはまだまだ続くだろう。そして、Tさんも同様であろう。Oさん、Sさん、Tさんから、これまでと同様、いろいろな情報や要請、依頼が今後も届くだろうか。そして、日本語コースを基盤としたMIA有志の会はそれに応えることができるだろうか。

OさんとTさんと繋がったことによってMIA有志の会は学び、考え、行動をおこすことができた。OさんやTさんたちに感謝しながら、これからもささやかではあるが復興への努力を続け、日本語コースの社会参加を目指していきたいと思う。

謝辞：一年の活動をともに続けてくださったMIA有志の会のメンバーとさまざまな局面で支援いただいたMIA事務局に感謝申し上げます。

[注]

¹ 文化庁月報No.515

http://www.bunka.go.jp/publish/bunkachou_geppou/2011_08/special/special_02.html
(2012年3月1日アクセス)

² 例えば、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、文化庁、公益財団法人浜松国際交流協会などにより開催されている。

³ 外国籍市民、日本籍市民を簡略化のため、外国人、日本人とする。

⁴ 武蔵野市国際交流協会教員ワークショップ

<http://mia.gr.jp/activity/kokusairikai.html> (2012年3月1日アクセス)

⁵ 外国人やその子女をサポートする組織を立ち上げ、幅広い活動を行っている。

⁶ とともに被災地である両市は隣接している。

⁷ ハロハロ <http://www.ministop.co.jp/ministopfand/halohalo/about.html>
(2012年3月1日アクセス)

⁸ 日本経済新聞夕刊「築こう多文化共生社会 宮島喬さんに聞く」2012年2月18日

⁹ 多文化共生の推進に関する研究会 報告書

http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf#search (2012年3月1日アクセス)

【文献】

- クロード・レヴィ=ストロース(荒川幾男訳), 1970, 『人種と歴史』みすず書房.
- 福岡伸一, 2007, 『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書.
- 春原憲一郎編著, 2010, 『わからないことは希望なのだ』アルク.
- 加藤千香子, 2008, 「日本社会と「共生」の再定義へ」『日本における多文化共生とは何か』新曜社: 242-251.
- 野山他, 2009, 「地域日本語教室の5つの機能と研修プログラム」『共生のまちづくりに向けた地域日本語教育プログラム—シリーズ多言語・多文化協働実践研究10』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター: 58-106.
- 最首悟, 2010, 「『わからなさ』をもち続ける」『わからないことは希望なのだ』アルク: 300-327.
- 清水博, 2003, 『場の思想』東京大学出版会.
- 杉澤経子, 2009, 「『多文化社会コーディネーター養成プログラム』づくりにおけるコーディネーターの省察的实践」『多文化社会コーディネーター養成プログラム—シリーズ多言語・多文化協働実践研究別冊1』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター: 6-30.
- 杉澤経子, 2010, 「多文化社会コーディネーターの専門性と職能」『専門性と社会的役割—シリーズ多言語・多文化協働実践研究別冊3』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター: 8-36.
- 田村太郎, 2000, 『多民族共生社会 ニッポンとボランティア活動』明石書店.
- 上野千鶴子, 2008, 『老いる準備 介護すること・されること』朝日文庫.